



『丹波篠山市史』の編さんから考える自治体史の中 世史料編の課題（〈特集Ⅰ〉自治体史編さんの現在2： 丹波篠山市史の取り組みと課題）

市沢， 哲

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 17:12-15

(Issue Date)

2025-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100505152>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100505152>



『丹波篠山市史』の編さんから考える

自治体史の中世史料編の課題

市沢 哲

現在『丹波篠山市史』の中世史料編の編さんが進んでいる。本稿では、その過程で見えてきた『丹波篠山市史』ならではの課題を指摘するとともに、自治体史の中世史料編が共通して持つであろう課題について言及することにした。

*

多くの場合、自治体史の中世史料編の編さんは、まずは史料集や記録から当該地域に関わる史料を抜き出すことから始まる。そして、ここで集められた史料が「編年史料」として時代順に並べられる。これが中世史料編の核をなすことになる。

『丹波篠山市史』の場合、こうして集められる史料点数が非常に多いというのが特徴である。中世の多紀郡はほとんどが荘園や保として分割され、都の荘園領主の所領となっていた。その結果、東寺領大山荘、近衛家領宮田荘、祇園社領波々伯部保、

東大寺領後川荘などのように、市域に関わる多くの史料が領主のもとに残されたのである。一般的に国衙領は国司が次々に交替するので、史料が残りにくいと考えられるが、多紀郡はその対極にあるといえるだろうか。史料の多さは、本が薄くなるか厚くなるかというスケールの問題にとどまらない、史料編の性格を規定する問題であるが、そのことについては後述したい。

中世史料編の編さんでは、以上のような史料収集と並行して、地域に中世史料が残されている場合は、実物の調査がなされ、多くの場合は編年史料とは別の史料群として収録されることがある。いわゆる「家わけ」文書である。『丹波篠山市史』の場合も、数件の家文書と古写経がある。特徴的なのは後者の古写経で、他地域に流出したものも含めると、兵庫県内の自治体のなかでは豊富に残っているといつてよいと思う。奥書に記され

た来歴からは、市域内外のつながりが見えてきて興味は尽きない。

これらの現物調査を行う際には、真つ先に史料の状態が気になるところである。合併以前の旧町下での自治体史編さんから今日までの間に、残念ながら焼失した文書もあるし、破損が激しいものもある。反面、定期的な虫干しが実施され、状態がよい史料もある。地域史料の調査の都度、個人や個々の寺社で史料を守り続けることの難しさを痛感する。自治体史編さんを機に、地域に残された史料の適切な保存方法の提案や修理計画の策定など、文化財保護審議委員会との連携が必要だと思う。

*

『丹波篠山市史』の中世史料編編さんの調査を進めていると、右のような特徴に加えて、さらに二点ほど新たな課題があることに気がついた。以下、簡単ではあるがこの点について触れておきたい。

第一は、近世の大名家史料の中の中世史料である。周知の通り近世の篠山藩は長らく青山氏の統治下にあり、おびたらしい史料が青山歴史村、兵庫県立鳳鳴高校などに伝来している。そして、これらの中には、少数ではあるが青山氏が収集したとおぼしき中世文書が残されているのである。

近年、渡邊正男氏（史料紹介 丹波篠山市教育委員会所蔵「貞永式目追加」『史学雑誌』一二八—九、二〇一九年）、木下竜馬

氏（「新出鎌倉幕府法令集についての一考察—『青山文庫本貞永式目追加』—」『古文書研究』八八号、二〇一九年および「翻刻 青山文庫本貞永式目追加 その一」『鎌倉遺文研究』四九号、二〇二二年、以後継続中）によって、青山家に伝わった貞永式目追加の写本が紹介された。貞永式目追加の写本自体は珍しいとはいえないが、青山文庫の写本は最古の部類に属し、既知の追加集と比べ原態を残す箇所があることが指摘されている。

青山文庫の中にはこれ以外にも中世文書の写本が数点存在することが確認されている。内容や作成主体には統一性がなく、文書の内容から集められた意図を探るのは難しい。現段階では、青山氏の統治にただちに関わる内容を持つと判断できる文書はほばないと言ってよい。さらに花押から考えて偽文書である可能性が高い文書もある。それゆえにこれらの文書は慎重に扱う必要があるが、近世大名家にとって中世文書がどういう意味を持ったのかを考えると、大名家文書のなかの中世史料を精査することが、『丹波篠山市史』中世編の課題の一つになるだろう。

*

もう一つの課題も近世史に関わる。丹波には近世に編さんされた地域の歴史をまとめた地誌類が多く作成されている。そのなかには知られていない中世後期の文書が収録されている場合がある。内容、花押の形状などから考えて疑わしいと思われる文書が含まれてはいるが、同時代史料と付き合わせて精査して

いく必要がある。

また、地誌に記された多紀郡の中世史そのものにも注意が必要であろう。今回の市史編さんでどこまで言及するべきか今後の課題であるが、〈中世の史料に基づいて考察された中世史〉と〈近世に語られた中世史〉の違いについて、近世史部会との共同研究も視野に置きながら、いずれは考えるべき問題であろう。

さらに近世に作成された中世に関する歴史記述という点で看過できないのが、地域で作成された軍記物語である。他地域の例を十分に知らないので正確な数量的な比較はできないが、戦国時代の合戦を題材にした地域軍記が残されている。これら軍記物語の作成主体や書写関係などについて研究があるのかも十分に把握できていない。また、先に述べた近世地誌類との関係も気になるところである。近世の丹波国における歴史書作成の旺盛さを考えると、おそらく両者の間には、相乗効果をもたらす何らかの関係があったのではないかと推測される。

地誌研究も含め、現在行われている自治体史編さんの「本筋」とは離れる複雑な作業になるが、同時代史料による歴史叙述とは異なる、地域における歴史の伝承、語りという観点から、今後これらの史料の研究、活用も考えていかねばならないだろう。

*

最後に、『丹波篠山市史』の編さんを通じて考えていること

から、自治体史の中世史料編を編さんする際の課題について、一言述べておきたいと思う。

先に『丹波篠山市史』の中世史料数の多さに言及したが、その理由は二つある。一つは大山荘の存在である。大山荘史料は古代に属する時期も含むと、概数でも千点を上回る。『相生市史』の矢野荘関係資料の数に匹敵するといつてよいだろう。そして二つ目の理由は、先述したとおり多紀郡に荘園、保が多いという地域的な特性による。大山荘を除いても千点近い史料が残されているのである。これだけの史料が収録された史料編が刊行されれば、多紀郡の中世史研究が前進する可能性も高まるであろう。

しかし問題もある。『丹波篠山市史』や『相生市史』のように、対象地域内に大量の文書を残す荘園があった場合、史料編は大部になる一方で地域間のバランスは大きく崩れることになる。また、これだけの史料を本に押し込むとなると、解説を書く紙幅はほぼ残らない。結果、漢文で書かれた史料が延々と続く史料編となってしまう。研究には資するかもしれないが、このような史料編を市民が喜んで手にしてくれるとは思えない。

それでは史料を厳選すればよいのではないか、という考え方もあるが、最初から史料を落としていることが明らかな史料集は、研究者にとって魅力はないだろう。それに厳選と言っても史料の選択基準を定めるのは容易ではないし、その時点での関

心でいったん選択された史料が、今後の歴史記述の可能性を狭めてしまう恐れも十分にある。煎じ詰めて言うところ、史料点数が程度を超すと、研究者と市民の双方を満足させる史料編を作ることが一層難しくなるのである。

*

近年の自治体編さんでは「市民に親しんでもらえる自治体史」を掲げるところがほとんどである。『丹波篠山市史』も例外ではない。そうだとすれば、史料編のあり方を大きく変える必要があるだろう。中世文書をすらすら読める市民を想定することは現実的ではない。綱文と解説を読めばおよそ史料の内容がわかるという考えもあるが、それでは市民にとって史料の本文の意味は無いも同然である。ましてや紙幅の都合で解説を付けることもできなければ、読めるのは綱文だけ、ということになってしまう。

網羅的であることと、一点ずつ内容を理解できることを両立させるにはどうしたらよいのだろうか。妙案と言うより愚直な方法と言うべきであろうが、網羅的に史料を集めた史料編とは別に、史料編に収められた史料を使って、史料の読み方や調べ方をわかりやすく説明した、古文書解説編のような本を作ってみてはどうだろう。独学もできるが、編さん委員や編さん室のメンバーが講師となって古文書読解教室を開く際に、テキストになるような書籍である。

このように史料編を目的別に編めば、販売の仕方も工夫ができる。主に研究者や教育研究機関が購入者となる網羅的な史料集はオンデマンド販売にすれば、在庫を抱える心配もない。一冊、一種類の史料編を刊行する方式は限界にきているのではないだろうか。

*

『丹波篠山市史』の中世史料編は、現時点では従来型の史料編としての刊行が決まっている。史料も網羅的に収集する方針を立てている。しかし、発刊までに刊行計画を見直す時期が段階的に設定されている。編さん委員会で史料編の使命が十分に議論され、全国のエデュケーションと丹波篠山市民の双方にとって意味のある史料編が作られることを望んでいる。